

稲荷信仰と鼻面稲荷社

中藤 保則 (信州短期大学)

The Japanese faith to the Inari Divine and Hanadura Inari shrine

Yasunori Nakafuji (Shinshu Junior College)

Abstract: We Japanese have some faith to the Inari Divine and Inari shrines, for there are about thirty thousand Inari shrines in Japan and they are most popular shrines for us. Originally the Inari Devine was the one of agricultural produce and Japanese have been agricultural people. Therefore it has become the most popular Divine and shrine for us. In Saku city there is the historic Inari shrine named "Hanadura Inari" shrine. The theme of this paper is to present "The Japanese faith to The Inari Divine and Hanadura Inari shrine."

Keywords: Inari, Inari Devine, Inari shrine, Hanadura Inari shrine.

I はじめに

日本にはさまざまな神社がある。もともと神社は日本古来の神を祀る祠であり、「産土神、天神地祇、皇室や氏族の祖神、国家に功労のあった者、偉人・義士などの霊を祀ったところ」(大辞林)である。産土神は生まれた土地の守護神であり、天神地祇は天の神と地の神、天つ神と国つ神、要するにあらゆる神々のことであるから、八百万の神がおられる国日本では祀る対象は数多く、そこに国家に功労のあった者などが加わってくるために、種類も数もさらに多くなったのは当然である。

なかでも稲荷神を祀る稲荷神社はもっとも数が多く、全国で2万余とも3万余あるともいわれる。江戸の街では「火事、喧嘩、伊勢屋、稲荷に犬の糞」という流行り言葉があったほどで、どこにでもあり、もっとも目につくもののひとつとされていた。それは江戸に限ったことではなく、稲荷神は全国津々浦々に祀られており、個人の邸内祠や、企業の敷地、ビルの屋上などに置かれた祠を含めると、ほとんど無数にあるといって過言ではない。また、昔から日常的にお稲荷様、お稲荷さんの名で親しまれており、稲荷神社は日本人にとってもっとも身近な神社であるといえる。

佐久市にも古い歴史をもつ鼻面稲荷社があり、2月の初午の日には大勢の参詣者で賑わいをみせている。また、ほとんど知られてはいないが、同社の絵馬のひとつを、信州短期大学の関係者が発起人となって修復したという縁もある。

しかし、稲荷信仰とは何なのか、なぜお稲荷さんには狐がつきものなのか、改めて問われると意外に知らないことに気づかされる。

この稿は、稲荷信仰について、そして、佐久平の観光資源の重要なひとつである鼻面稲荷社について、その概要を紹介するのが目的である。

II 稲荷信仰

稲荷神、稲荷大明神は、宇迦之御魂大神(うかのみたまのおおかみ)、あるいは宇迦之御魂神(うかのみたまのかみ)であり、倉稲魂命とも書いた。稲を代表とする五穀をはじめすべての食物や養蚕をつかさどる神であった。もともと山城に渡来した氏族で、とりわけ絹織物の技術に秀でていたことから有力豪族となった秦氏と特別の関係をもっており、『日本書紀』『山城国風土記』などにそれらの記述がみえる。

稲荷の字を充てたのは、その神像が稲を荷っていることからであるといわれる。また、一説では、収穫した稲を荷のように架けて乾燥させることからきているという。そして、稲荷「いねなり」が約音便によって「いなり」となったというのは定説と考えるとよいと思われる。

全国の稲荷神社の総本社は、京都市伏見区、稲荷山西麓にある伏見稲荷大社である。秦氏の祖先である伊呂具の秦公(いろぐのはたのきみ)の逸話が『山城国風土記』逸文にあり、もともとは氏神として祀るようになった秦氏族の神社であった。都が平安京に遷都されると、この地を基盤にしてい

た泰氏が政治的にも力を持ち、それとともに稲荷神が広く信仰されるようになった。

ただ、時代が進むとともに、稲荷神はより幅広い概念を含むようになる。教王護国寺(東寺)建造(796年)の際に、泰氏が稲荷山から木材を提供したことなどから、稲荷神は東寺の鎮守とされるようになり、真言密教と習合して、さらに多くの尊崇を集めるようになった。特に稲荷神社の最大の行事である初午には一般民衆が詰めかけるようになった。

東寺では、真言密教における茶枳尼天(だきにてん、インドの女神ダーキニー)に稲荷神を習合させ、真言宗が全国に布教されると共に、茶枳尼天の概念も伴った稲荷信仰も広まっていた。茶枳尼天はもともとインドの民間信仰から密教によって仏教に取り入れられたもので、人の死を六ヶ月前に予知して、その心臓を食らうとされる夜叉、羅刹の一種で、中世には霊狐と同一の存在とみなされたという。

そのため日本各地にある稲荷神社の神道における総本社は伏見稲荷大社だが、神仏習合思想における茶枳尼天が本地仏とされる仏法では、総本社は愛知県にある豊川稲荷とされている。

私たち日本人は農耕民族であり、主として稲作によって生計をたて、米を主食とし、独自の文明を築き上げてきた。稲荷神がもっとも広い信仰を集めるようになったのは、いわば必然であるといえよう。しかし、中世から近世にかけて、工業が興り、商業が盛んになると、稲荷神の神格も拡大して、農耕神から、殖産興業神、商業神、屋敷神と多彩な内容を包括するようになった。⁽¹⁾⁽²⁾

逆にいうと、日本人の生活にもっとも近い農耕の神、稲荷神が、身近に新たな工業や商業が興り、盛んになるにつれて、それらの概念も取り込んでいったのは、これもまた必然といえるかもしれない。稲荷神社が日本最多の神社となった理由もこの点にあると考えてよいだろう。

III 稲荷神社と稲荷神の使い“狐”

稲荷神は他にもいくつかの呼び名があった。豊宇気毘売命(とようけびめ)、保食神(うけもち)、大宣都比売神(おおげつひめ)、若宇迦神(わかうかめ)⁽²⁾ などと呼ばれていたが、とりわけ饌津神(みけつがみ)という別称があったことが興味深い。神社といえば狛犬が鎮座しているのが、我々にとって見慣れた光景だが、稲荷神社にはなぜか狐、主として宝玉をくわえた白狐が鎮座している。

これは饌津神(みけつがみ)と狐の古名である「けつ」と音が共通していたことから、三狐神(みけつがみ)の字を充てたことに由来するという。また、民間信仰では、中世より狐が

稲荷神の使いであり、あるいは眷属であるとされるようになった。眷属とは仏や神に付き従う者であるが、江戸時代には稲荷神は、すなわち狐であるという誤解も生じた。しかもこの誤解は、我々のなかに結構根深く残っているものと思える。

他の神社の祭礼とは趣を異として、稲荷神には神酒、赤飯などの他に油揚げが供えられる。狐の好物とされているからである。そのため、油揚げを使った料理を稲荷と称するが、なかでも稲荷寿司はお稲荷さんと呼ばれ、我々にとって弁当の定番のひとつとなっている。

稲荷神社では、2月の最初の午の日に「初午祭」が行われ、年間を通してもっとも賑わう祭となっているが、これは伏見稲荷神社の祭神が降りたのが、和銅4年(711)2月の初午の日であったからといわれる。⁽²⁾

IV 鼻面稲荷社

佐久市岩村田字鼻面にある鼻面稲荷社(神社)は、湯川の左岸の断崖上にあり、京都の清水寺の板敷き舞台を彷彿とさせる造りである。また、湯川から岩村田市街を臨む景勝の地に建てられており、旧中山道岩村田宿からも至近の距離にある。写真①

祭神は宇迦之御魂命(うかのみたまのかみ)で、岩穴に西向きに本殿を設け、拝殿、神楽殿が設けられている。永禄年間(1558~70)岩村田の今井源八、上原甚七、市川善六、望月源助が創設したという。規模が大きい神社では他の神社をも祀っているのが常だが、同社には境内神社が5社ある。⁽³⁾穂具社、杵築社、秩父社、埴持社産体社で、いずれも石祠である。「2月の初午の日には参詣者で賑わい、湯川の川原で古いだるまを焼き、新しいだるまを買って求める。例祭は9月10日、この神社は商売繁盛の神様として商店の信仰があつた」⁽⁴⁾

上記は『佐久の神社と信仰』からの引用であるが、私たちにふたつのことを教えてくれる。ひとつは、元来農耕の神であった稲荷神に対する信仰が前述のように広がりを見せ、確かに商業の神として定着していることである。そして、初午や例祭には高崎市周辺、すなわち上毛(群馬県)の業者が多く参集することである。岩村田宿は旧中山道にあって、宿場としての機能もさることながら、米穀や養蚕の集積地、そして交通の要衝として栄えた。そのため上毛とは、古くから密接な関係があったのである。

祭は初午の他にも、歳旦祭(1月1日)、二の午祭、小満祭、例大祭、除夜祭(12月31日)が行われている。小満祭というのは、二十四節気のひとつで、太陽の黄経が60度に達す

る時であり、各地の稲荷神社で祭が行われている。太陽暦では5月 21 日頃で、佐久市では白田の稲荷山小満祭がもっとも知られている。節氣の読み方は「しょうまん」だが、祭は「こまんさい」と呼び慣わされているようである。

また、境内や隣接の鼻面公園には、いくつかの文学碑が建てられている。「荻原井泉水」、「山頭火、関口江畔・父草」、「山室静・故郷」などで、恰好の散策空間となっている。

V 修復された絵馬

古い歴史を誇る鼻面稲荷社には、奉納された絵馬が掲げられている。関係者に聞くと、まだまだ数多くの絵馬が所蔵されているという。絵馬というのは祈願あるいは報謝のために奉納された絵入りの額や板絵である。もともとは生きた馬を奉納する代用として馬の絵が描かれたものが多いという。佐久平は古代より官牧が置かれ、駿馬の名産地として知られた土地である。そのため、遺された絵馬も数多く、歴史的、民俗学的に貴重なものも少なくないと思われる。

ただ、鼻面稲荷社の絵馬は、長い歴史を物語るかのごとく、劣化が著しく、判別できないものが多い。しかし、本殿に入っただけのところに、色鮮やかな絵馬がひとつ掲げられている。桑の葉が描かれたものと思われるが、よく見るとその多様な形態に驚かされる。佐久平は養蚕によって栄えた地でもあることを、改めて知らされるのである。

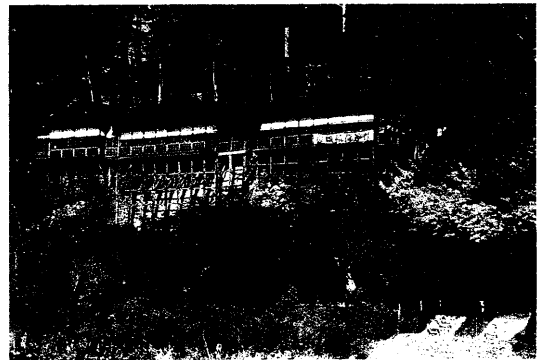
この絵馬は修復されたものである。左脇のごく目立たないところに、「修復完成日 平成7年2月8日」という額が掲げられている。そこには「修復 鈴木公人」「監修 篠原昭 武井隆三」「奉賛 榎山幹男」とある。篠原昭先生はこの9月まで信州短期大学の学長を務めた方であり、榎山幹男氏は学校法人佐久学園の現理事長である。お二人の発案、尽力で「佐久地域文化研究センター」が立ち上げられた。

VI おわりに

信州短期大学の「佐久地域文化研究センター」が正式に発足したのは、平成19年4月である。地域の文化を研究し、継承し、そして、地域の文化遺産として広めていきたいという目的であるが、その母体となったのは、上記のような以前からの地道な活動であった。

地域文化の研究という意味において、佐久平とその周辺はまさに宝庫である。掘り起こせば掘り起こすほど、その魅力がましてくる。また、各分野ですぐれた研究が行われ、多くの実績が積み重ねられている。ただ、それらが、まだ、個々の“点”として存在していることは否めないだろう。

今回紹介した「鼻面稲荷社」もそのひとつであり、それらの



写真①湯川から観る鼻面稲荷社



写真②本殿に向かう参道



写真③鼻面稲荷社本殿



写真④修復された絵馬

歴史的価値と魅力を掘り起こし、集積して、紹介する、そのような活動を通じて、私たちも地域文化興隆の一端を担いたいと願っている。

(2007年11月19日投稿、2007年11月29日受理)

[参考文献]

(1)『国史大辞典』吉川弘文館, (1997)

(2)『フリー百科事典ウィキペディア』
<http://ja.wikipedia.org/wiki/> (2007.11.8)

(3)『佐久市志・歴史編(二) 中世』佐久市志編纂委員会,
(1993)

(4)『佐久の神社と信仰』平井富三、菊池清人著 信濃教育
会出版部, 112-113(1989)